ジッドをめぐる実証研究の精華

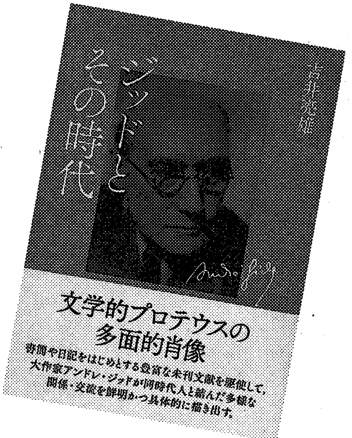
ジッドの再評価を促す新たな段階を待っていたかのように上梓された一冊

堀畑正樹

吉井亮雄 著
▶ジッドとその時代
1・31刊　Ａ５判674頁　本体9000円
九州大学出版会

アンドレ・ジッドに関する実証的な研究であり、ジッドが同時代人ととり交わした未刊書簡約140通と、新聞・雑誌に掲載された書評や論文を訳出・提示する。訳出された書簡や書評の前後をつなぐのは綿密な考証に裏付けられた論述である。プルーストに関するすぐれた研究がつぎつぎと出版されているだけに、長い間その出版が待たれた著作である。著者は1987年に「アンドレ・ジッド『放蕩息子の帰宅』校訂版」をソルボンヌ大学に提出し学位を取得した吉井亮雄氏である。校訂版の作成は、フランス人研究者の格別な信頼なくしてはなしえぬことで、校訂者の実力のほどが窺われよう。

さて、本書は長短合わせて22章から成り、5部構成で、各部は4章あるいは5章を収める。以下、特に興味深く読んだ章を取りあげて本書の内容紹介としたい。



著者が第Ⅰ部第1章に置くのは、ジッドの自伝『一粒の麦もし死なずば』の冒頭と末尾の読解である。自伝の冒頭を構成する二つのエピソードをめぐって、クロード・マルタンと並ぶジッド研究の泰斗ピエール・マッソンとは逆の解釈を提示した後、ジッドの自伝の冒頭と末尾における「主題論的照応関係」について、ジッドの「入念で計算された構成」を備える自伝の叙述に言及しつつ、無理のない鮮やかな考察を提示している。

第2章には、ある主張に対して反論が必要になったとき、実証的研究なくしてはなしえない論証と批判が展開されている。ジッドの批判精神を彷彿とさせる。

第4章の「ジッドとナチュリスム」もきわめて興味深い。ジッドとナチュリスムの領袖ブーエリエの往復書簡が巧みに配置されていて、時代の何が、また二人の資質の何が、両者の命運を分けたのかが暗示されている。そして、この章の最後に提示されているブーエリエのジッド宛書簡のなかに、「私は、あなたの作品のなかに存する美のことごとくが意識の告白、魂の伝記に外ならぬと感じています」という一文があり、ジッドの作品に対する最良の賛辞であるだけに、ブーエリエの無念と諦念は察するに余りある。

第Ⅱ部第3章は、「「状況に想をえた小品」――『放蕩息子の帰宅』の生成、作品の読解、同時代の反響――」と題されている。やはり、この章が本書の白眉であろうか。ジッド文学におけるこの作品の重要さが明かされる。著者が引用するのは、ジッドがベルギーの友人クリスチャン・ベックに宛てた書簡である。ジッドはそのなかで、この作品に「私の心情のすべてと、そして同時に私の理性のすべてを注いだ」ことや、芸術作品は「果実」であるよりも「傷や断裂を塞ぐためにできた樹液の瘤」であることや、また他者の苦悩に憐憫と愛で応える者こそがキリスト者であるという自負を率直に語っているのである。

第Ⅲ部第3章は「ジッドとリルケ――『放蕩息子の帰宅』ドイツ語訳をめぐって――」と題され、短い章であるが、文献学者の面目躍如たるものがあり、明快で、すぐれている。作品の読解に直接かかわる重要なヴァリアントで、リルケの言う「最初の版」とは『詩と散文』に掲載されたプレオリジナルのことではなく、100部限定（十非売品20部）で刷られた大型豪華版であったことを見事に解明しており、ジッドと「何にもまして原作の読解に意識的かつ創造的に加わる」リルケとの文学的交流に新たな光をあてる。

第Ⅴ部第1章は「ジッドの盛澄華宛書簡――中国人フランス文学者との交流――」となっているが、盛澄華宛書簡のことだけではなく、ジッドの妻マドレーヌの死やマルク・アレグレとの恋、日本映画『田園交響楽』のことなどが触れられており、きわめて示唆に富む論述になっている。

第Ⅴ部第2章は、あの「プレイヤッド叢書」とジッドの深いかかわりを教えてくれる。まず、ジッドの『日記』が1939年6月末に「プレイヤッド叢書」第54巻として世に出るが、20世紀の作家がこの叢書に入るのは初めてのことで、まさに「文学的事件」であったこと。次に、同時代人がすでに『日記』をひとつの作品として受容・評価していること。また、第一次大戦のとき、兵士が戦地に『地の糧』を携行したように、第二次大戦時、兵士が『日記』を携行したこと。さらに、サルトルがプレイヤッド版を通読して、「この作品にはすべてがある。ただ覆い隠されていただけだ」とそれまでの判断が間違っていたことを認めたことなどである。

「省略のない芸術はない」を信条とした大作家に倣って、以下は割愛しよう。最後にこのことだけは付言しておこう。

本書の価値と成立過程は、「あとがき」の簡にして要を得た記述のなかに書き込まれている。是非とも一読されたい。この本のすごみは、当たり前のことを当たり前に実践しているところから来る。この当たり前が難しいのだ。国文学者や日本史の研究者なら普通にやっていることを、外国文学研究者がやろうとすると途端に難しくなる。強靭な意志、お金、時間、幸運がなければなしえない本当に困難な仕事となろう。本書は文学の実証的研究の何たるかを教えてくれる。実証研究の本当の苦労と醍醐味は、実際にこの仕事に携わった者でなければわからないとしてもである。ジャン＝イヴ・タディエの『評伝プルースト』が思い浮かぶ。告白めくが、評者には『失われた時を求めて』を理解するには、吉川訳とこの評伝が不可欠なのだ。

第二次大戦後は実存主義、1960年代には構造主義、1970年代から1980年代にかけてはヌーヴェル・クリティックが猛威をふるい、出版界を席巻した。だが、時の経過とともに、文学研究を取り巻く状況にも変化が見られ、新たな段階を迎えている。ジッドの再評価を促すこのような時期を待っていたかのように上梓された『ジッドとその時代』は、まさにタイムリーな著作と言えよう。

（名城大学教授／フランス文学）